【用語】利根郡大原村―利根郡利根村　伊勢三日市―伊勢神宮の御師三日市家　見取―見取田畑のことで、税率が低く、村の石高に加えない土地　徒党―事をたくらんで団結する　時の声―鬨の声、大勢が一度にあげる声　手指―手だし　月迫―月末　月岡修理―沼田藩土岐家の国家老　瑕瑾―きず、恥　大殿君―沼田藩主、土岐美濃守定経　今生之御暇―この世のわかれ　神妙―おとなしく、すなおに　神妙之由―感心なこと、すぐれている

【解説】沼田藩では、貞享検地以降、農民が山林原野などを開発して田畑にした場合、これを見取田・見取畑と呼び、本田畑の高に加えないで年貢率も極めて低くしていた。ところが天明元年（一七八一）春の頃、藩主土岐定経（さだつね）は、藩財政立て直しの施策として、見取場を石高に組み入れ、年貢増収をはかる計画を立て、領内の有力農民三人を「土見役」に任命した。

この文書は、それに反対する農民の動きと藩役所の対応、とりわけ家老の月岡修理を中心に記録されている。見取高入れの計画を知った農民は、立岩村の佐七、奈良村の要右衛門・民右衛門らを中心にして、十二月十九日、高平村の土見役勘兵衛親子の家に押しかけ、また後閑村の作右衛門と交渉し、土見役の辞任と計画撤回を認めさせ、さらに、来春には沼田城下に押し寄せる決議をして農民はひとまず解散した。一方、これを聞きつけた月岡修理は、農民の要求はもっともであるとし、大坂城代として赴任している藩主の元に駆けつけた。そして農民の要求を認めるのが最善であると進言し、計画を撤回させた。こうして農民は勝利を得たが、沼田藩の首謀者探索は厳しく、佐七ら三人は永牢となった。なお筆者の大原村の金子重右衛門は絵図師であるが、彼の残したこの「家伝秘録」には見取騒動のほか、さまざまな出来事が記され、当時の社会状況を知る貴重な史料となっている。